

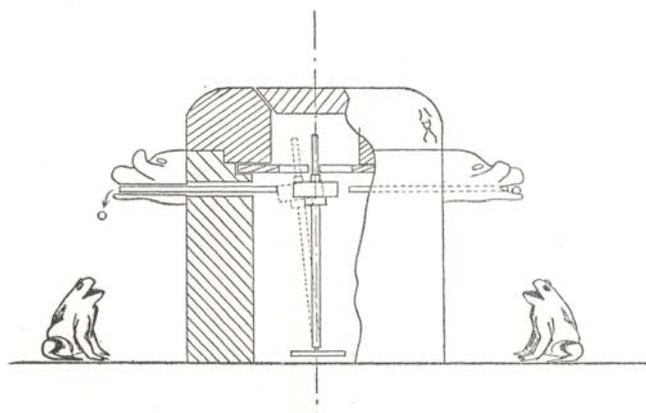
# 鯨絵にみる日本人の地震観の変遷

兵庫県立人と自然の博物館 加藤茂弘

## 太古の日本人と地震

私たち日本人の祖先が自然と一体となって暮らしていた太古の時代には、地震はどのようにとらえられていたのでしょうか。近畿地方では縄文時代の終わりから古墳時代にかけて数多くの大地震がありました。これは活断層の調査や、考古遺跡で発見された地割れや噴砂の跡の年代を知る方法（地震考古学）などからわかります。活断層の近くでは古墳時代以前や古代・中世の遺跡も多く見つっていますが、大地震の前後で、これらの遺跡の立地に大きな変化は認められません。また雷、大雨、山火事などの自然現象や自然災害を記述した神話は残っていますが、地震を表す神話は残されていません。こうしたことから、太古の日本人が地震をほとんど意識していなかったことがうかがわれます。

いっぽう古代の中国では、地震の原因は、大地に蜂の巣のようなすき間があり、そこで陰の気（水）と陽の気（火）が接触すると大激動を起こし、地震を生じるという陰陽説で説明されました。地震はあやまった政治を行った為政者への天の怒り（天罰）と考えられ、地震と社会を結びつける思想が広まっていた。



張衡の地動儀の復元模型（国立科学博物館所蔵）とその断面図

地動儀の中央にある倒立振り子が、地震動で倒れて龍につながる棒を押すと、その口にくわえられている銅の玉ががまの口に落ち、地震があったとわかるしくみになっている。

こうした思想があった古代中国でも地震を科学的にとらえる試みがなされています。

後漢時代の西暦 132 年に、張衡という学者が地動儀という世界最初の地震計（感震器）を考案しています。古くから都市が発達して多くの地震被害を受けてきた中国では、震源地をいち早く知って対策をとることが大切であったのでしょう。

## 古代・中世の日本人の地震観

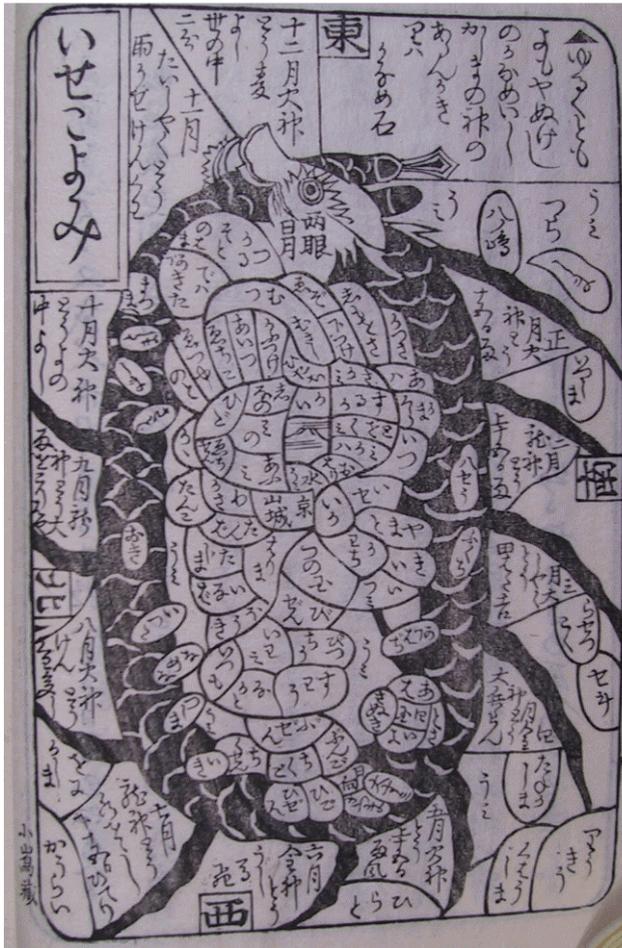
日本でも飛鳥・奈良時代になると、古事記や日本書紀に地震の記述が登場します。最初の地震記録は日本書紀にある 416 年大和地震で、「地震（なみふる）」とのみ、あります。その後、推古天皇七（599）年には、「地動きて、舎屋悉く破れぬ。則ち四方に令して、地震神を祭らしむ。」と書かれています。古代には、天変地異の一つである地震も神様のしわざとされ、地震が起こると神様の怒りを鎮めるため祭りをして祈るだけでした。

平安時代になるとそれまで「なみふる・なみ・なへ」とよばれていたものが、「地震」と記されるようになります。かの学問の神様・菅原道真も、登第の試験（上級官僚への昇級試験）で「弁地震（じしんをわきまふ）」という問いに答えています。この頃には地震という言葉とともに、中国から仏説や儒教思想、あるいは陰陽学にもとづいた地震観が日本へと伝えられ、漢文を読める知識人の間に広まっていたのです。

いっぽう民衆の間では、地震は神の起こす天変地異の中で、もっとも恐ろしいものであると考え続けられていました。方丈記を残した鴨長明も恐ろしいものをあげる中で、「羽なれば、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らむ。恐れの中かに恐るべかりけるは、只地震なりけりとこそ覚え侍りしか。」と書いています。鎌倉時代には、こうした地震への恐れと、風・水・火とか陰陽の気といった地下の何らかに地震の原因を求める中国の地震観が、日本古来の地震神信仰と結びつき、地下に潜む竜や大魚が暴れることで大地震が起こるといふ、日本独自の地震観に変わっていったと思われまふ。

この地震観は、鎌倉時代の初めに描かれ、江戸時代の伊勢暦の表紙に使われた地震虫の図や、江戸時代の初めに描かれた大日本国地震之図からおしはかることができます。これらの

図では、日本列島を取り囲む異様な姿の動物を龍とも鯀ともよんでいません。しかし、とぐろを巻き二本の角を持ったその姿から、地下に潜むこの生物を龍と考へても良さそうです。地理学者もこうした日本図を「龍絵日本図」とよんで、ひとまとめにしています。



右：大日本国地震之図 1624（寛永元）年刊（原田正影所蔵） 現存する最古の日本図。江戸がなく鎌倉が誇張されており、中世の要素が残されています。龍のひれには月毎の地震占いが、その周りには天の高さ、京都から本州の両端までの距離、寺社の数などが書かれています（日本の古地図、1969 より）。

左：江戸時代の「いせこよみ」に描かれた地震の虫（和本・地震考より） 日本を取り囲む龍のような動物が描かれており、右上の「ゆるぐとも よもやぬけじのかなめいし かしまの神のあらんかぎりハ」の地震歌から、地震神としての鹿島信仰がわかります。

1855（安政二）年江戸地震の直後に出版された地震考という本は、「鯀が尾ひれを動かすときに地震が起こるといふ俗説」のよりどころを探るため、次の地震観を紹介しています。

1198（建久9）年の暦の表紙に、「地震の虫」として地震を起こす異形の生物と日本国 66 州の名前が描いてあることを述べ、さらに仏教では地震を起こすのは龍のしわざであると

されることに触れています。残念ながら、この暦は1198年以降に作られた贋物<sup>にせもの</sup>であることがわかりました。このため今では、地震虫や地震龍の起源がどこまで古くなるかはわかりません。しかし地震鯰以前に、多くの人々が地下に潜む龍が地震を起こすと信じていたことだけは、まちがいないことでしょう。

## 地震鯰の登場－1855（安政2）年江戸地震と鯰絵

天下人<sup>てんかびと</sup>・豊臣秀吉<sup>とよとみひでよし</sup>が、伏見城<sup>ふしみじょう</sup>の築城<sup>しよしだい</sup>について京都所司代<sup>しよしだい</sup>にあてた手紙で「なまつ（なまず）大事<sup>だいじ</sup>にて候<sup>そうろう</sup> まま…」と、地震を鯰にたとえた話が残されています。しかし一般には、地震の原因とされた龍が鯰に変わったのは、江戸時代中頃と考えられています。松尾芭蕉<sup>まつおばしろう</sup>が1679（延宝七<sup>えんぼう</sup>）年によんだ句に、「大地震<sup>おほいづみ</sup>つづいて龍<sup>りゆう</sup>やのぼるらん<sup>にしゆん</sup> 似春<sup>にしゆん</sup>、長十丈<sup>たけじゆうじょう</sup>の鯰なるらん<sup>とうせい</sup> 桃青<sup>とうせい</sup>（芭蕉）」とあり、これが、龍が鯰に変化することを示した最初の史料とされているからです。その後、地震鯰の確立にはさらに百年以上の年月が必要でした。

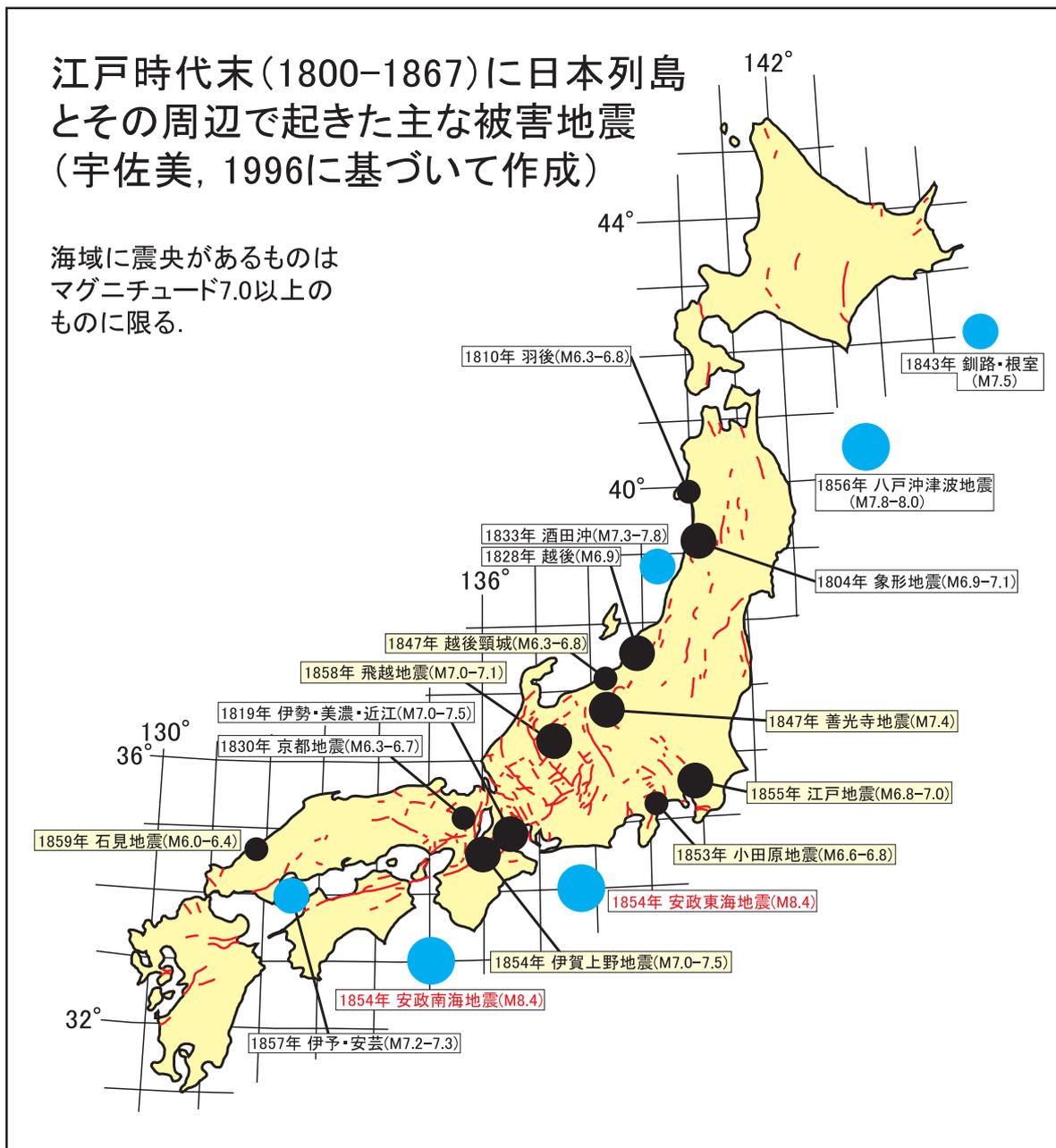
江戸時代も二百年を過ぎると、幕藩体制<sup>ぼくはん</sup>が揺らぐ一方で商人たちは富を貯え、町民を中心とした江戸文化<sup>はな</sup>の華<sup>はな</sup>が咲きます。この時代には、異常気象が日本列島をおそい、天保<sup>てんぼう</sup>の飢饉<sup>ききん</sup>で多くの餓死<sup>がし</sup>・病死者<sup>びやうしや</sup>が出ました。江戸の街でもコレラなどの疫病<sup>えきびやう</sup>が流行<sup>は</sup>り、多くの命が失われました。こうした混乱の中で、日本列島の大地もおおいに揺れ動きました。

1830（文政三<sup>ぶんせい</sup>）年に京都地震が起り、人々を不安におとしおこします。1847（弘化四<sup>こうか</sup>）年には、ご開帳<sup>ごかいだん</sup>の最中<sup>しなのくに</sup>の信濃国<sup>しんのくに</sup>・善光寺<sup>ぜんこうじ</sup>を大地震が直撃します。全国から集まった6千人以上の参拝客<sup>さんぱいきやく</sup>が亡くなり、「死にたくハ信濃へござれ善光寺うそじゃない物本多善光<sup>ほんだぜんこう</sup>」などと唄<sup>うた</sup>われました。この地震の直後に、鯰の姿を書き込んだ災害瓦版<sup>かわらばん</sup>が江戸で発行されます。江戸庶民の間に地震の到来をつげる「鹿島の鯰男」の伝説があったこともあり、この地震鯰が注目を集めはじめます。

大津波が太平洋岸を洗った1854（嘉永七<sup>かえい</sup>）年の東海・南海地震に続き、1855（安政二）年11月11日、百万人都市・江戸でマグニチュード6.9の直下地震が起りました。これが安政江戸地震で、四千人以上の命<sup>うば</sup>が奪<sup>うば</sup>われました。地震直後には、瓦版の色刷り技術が発

展したこともあって、地震鯨をモチーフに世の中を風刺する色刷り瓦版（鯨絵）が大量に  
まわり、江戸庶民に地震を起こす鯨＝地震鯨のイメージが定着しました。

こうして息を吹き込まれた地震鯨は、幕末の激動期をへて明治時代の中頃まで、庶民の  
間で生き続けることとなります。鯨絵から生まれた「世直し」や「万歳楽」という大地震に  
対するイメージも庶民の間に深く根付き、明治・大正の世になっても大地震が起きると、  
人々は「世直し」とか、「万歳楽」と叫んで外へ逃げ出したということです。



1854（嘉永七）年の東海・南海地震の後に年号が「安政」に改められたので、この2つの海溝型地震を、安政の東海・南海地震とよぶこともあります。南海地震前後の10年間に内陸で7回の直下型地震が発生しており、まさに大地動乱の時代であったことがわかります。赤線は陸域の活断層。

## 江戸庶民の息吹を伝える鯰絵

安政江戸地震の直後に大流行した鯰絵は、鯰をモチーフとして当時の江戸庶民の文化を描き出したものともいえます。さまざまな鯰絵の一部を、ここに紹介しましょう。

**地震鯰**：地震の象徴としての鯰は 1847（弘化四）年善光寺地震直後の瓦版で初めて描かれ、この地震の後の色刷り瓦版で大ブレイクしました。地震を起こした鯰が、雷や火事と比べて描かれたりしています。（1 地震・雷・過事・親父、6 鯰涅槃、8 江戸鯰と信州鯰）

**こらしめられる鯰**：地震で被害を受けた人々が鯰をこらしめたり、蒲焼にしたりしています。

鯰絵の最大の功績は、姿の見えない地震の張本人をひょうきんな鯰に仕立てた点でしょう。

人々はこの鯰をこらしめ笑い飛ばすことで、地震のうっぷんを晴らすのです。（9 万歳楽鯰

の後悔、10 太平の御恩沢に、15 江戸前かばやき鯰大火場焼）

**要石**：古来より鹿島大明神は、要石で地下の龍蛇（地震鯰）を押えて、地震が起きるのを防ぐとされました。このため鹿島大明神・要石・鯰は、鯰絵を構成する三大要素となっています。

（3 自身除妙法、11 あら嬉し大安日にゆり直す、13 鯰を押える鹿島大明神）

**世直し鯰**：鯰は悪役として描かれたばかりではありません。江戸庶民は、天地をめぐる「気」

の流れが滞ると、地震が起きて「気」の巡りが回復するのだと考えました。この「気」

を「金」と見て、地震後の復興景気をはやし立てる鯰絵も表れています。（12 鯰の掛軸、

16 世直し鯰の情）

**損をした金持ち・儲けた職人**：江戸地震では、損をしたのは金を貯めこんだ持丸（金持ち）

で、儲けたのは、復興景気で仕事が増え、手間賃がはね上がった職人たちでした。鯰絵は、こ

れら両者を皮肉たつぷりに洒落とばしています。（5 世ハ安政民之賑、7 鯰めをはなし大

きにゆすられて、14 持丸たからの出船）

**歌舞伎と流行唄**：芝居（歌舞伎）は江戸庶民の最大の娯楽でした。また大津絵節、拳唄、す

ちゃらかなどは、当時の流行歌の一つでした。これらを鯰絵の作者たちが見逃すはずはなく、

いろいろな題材が鯰絵に採用されています。（2 地しんどう化大津ぶし、4 雨には困り

ます  
□野じゆく しばらくのそとね、）



1 地震・雷・過事・親父



2 地しんどう化大津ゑぶし



3 自身除妙法



4 雨には困り口野じゆく しばらくのそとね



5 世ハ安政民之



6 鯰涅槃



7 鯰めをはなし大きにゆずられて



8 江戸鯰と信州鯰



9 万歳樂鯨の後悔



10 太平の御恩沢に



11 あら嬉大安日にゆれ直す



12 鯨の掛軸



13 鯨を押える鹿島大明神



14 持丸たからの出船



15 江戸前かばやき鯨大火場焼



16 世直し鯨の情

## 地震鯨から官僚鯨へー明治・大正の鯨絵

明治時代になると、地震の象徴としての鯨は姿を消します。しかし、鯨絵のように擬人化された動物を通して世の中を風刺する技法は、明治時代になっても生き残っていきます。明治6年～7年には、うさぎを擬人化した錦絵、いわゆる「兎絵」が大ブームとなりました。この兎絵も100種類以上が出版されたといわれます。江戸末期の鯨絵作者たちも、兎絵に負けていたわけではありません。彼らは明治の世になると、新時代のエリートである高級官吏を鯨で象徴的に描き出し、世相を風刺し始めます。当時の政治家や官僚たちは鯨ひげ（やどじょうひげ）をはやしたて、黒服をまとっていたため、鯨に描かれたのでした。こうした鯨絵は、1891年濃尾地震や1923年関東大地震の直後にも、大災害を忘れないようにとの目的もあり、数多く描かれています。

1891年濃尾地震（マグニチュード8.0）は、岐阜県や愛知県でたいへん大きな地震災害ー濃尾震災を引き起こしました。この地震の直後には、被災者の救済のため、明治天皇をはじめ、国や企業、多くの個人から義捐金が集まりました。しかしその配分をめぐり、愛知県と岐阜県で一悶着があったのです。これを描いた鯨絵では、尾張・美濃と描かれた大鯨が首引き（勢力争い）をしています。この鯨絵からは地震後の世相だけでなく、江戸時代からあった尾張（愛知県）と美濃（岐阜県）の長い確執の歴史が、みごとに描き出されているように感じられます。



義捐金をめぐる愛知県・岐阜県の争いを描いた鯨絵（岐阜市歴史博物館所蔵）



左：ドン二分前の地震が権兵衛ドンの内閣を生んだ（北沢楽天、『時事漫画』大正12年10月7日号）加藤友三郎首相の病死後、後任の山本権兵衛が組閣中の9月1日に関東大震災が発生しました。

右：米俵のさし持（小林清親、『团团珍聞』明治24年11月14日号）米俵を鯰と猪がかついでおり、濃尾震災で米価が高騰したことを風刺しています。（いずれも鯰絵—震災と日本文化から抜粋）

## 世ハ平成、民の賑い

私たちの祖先は大地震とともに生き、その経験<sup>かて</sup>を糧として、「震災文化」を残してきました。地震鯰をモチーフにした鯰絵は、その象徴といえるでしょう。この鯰絵の中に、「平<sup>たいら</sup>」という文字を記し、世の中の平穩無事<sup>へいおんぶじ</sup>を願ったものがあります。今の「平成」の年号も、同じ願いを込めて作られました。しかし皮肉なことに平成の時代は、次の地震活動期の序章であるといわれています。鯰絵の登場から150年以上の時をへて、私たちは地震のしくみを知り、自らの命と財産を守る知恵を生み出しました。南海地震をはじめ、迫り来る大地震への備え<sup>そな</sup>を忘れずに、新しい文化の華を咲かせていきたいものです。

### 引用・参考文献（主なものをアイウエオ順に示す）

- 宇佐美龍夫（1996）新編日本被害地震総覧．東京大学出版会，493頁．
- 尾池和夫（1979）中国の地震・日本の地震．東方書店，261頁．
- 小野秀雄（1960）かわら版物語．雄山閣出版，361頁．
- 寒川 旭（1997）揺れる大地—日本列島の地震史．同朋社出版，272頁．
- 南波松太郎・室賀信夫・海野一隆編（1969）日本の古地図．創元社，192頁．
- 萩原尊禮（1982）地震学百年．東京大学出版会，233頁．
- 宮田 登・高田 衛監修（1995）鯰絵—震災と日本文化．里文出版，369頁．